

平成 27 年 1 月 5 日

マレーシア版研究学園都市の建設状況を視察
(マレーシア、サテライトオフィス報告)

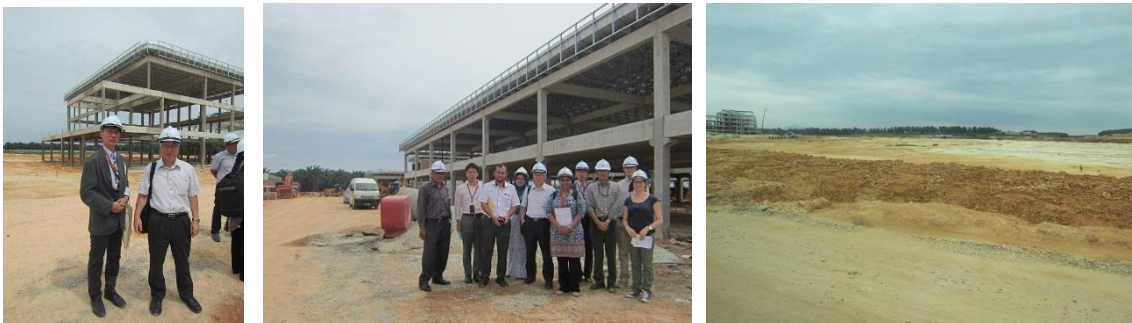
新年の仕事始めとして、1月5日に現在マレーシア南部に建設中の研究学園都市の工事進捗状況を確認するため、パゴー地区を訪問した。

パゴーはクアラルンプールとシンガポールの間に位置する小さな地方都市であるが、マレーシア政府はその郊外に筑波をモデルにし、UTM など 4 つの大学をコアにした研究学園都市を建築している。都市全体の面積はおよそ 16 km² で、その内 4 km² が大学エリアに割り当てられている。筑波研究学園都市の場合、総面積が 27 km² でその内 2.6 km² が筑波大学なので、おおよその規模が想像出来ると思う。



視察には杉浦教授や岩本浩二准教授の他、後藤雅史教授、原啓文准教授、Pramila Tamunaidu 講師、Mariam Firdaus Mad Nordin 講師、Rory Padfield 講師、Effie Papargyropoulou 講師、Nor'Azizi Othman 講師の EGT および環境工学講座の主要メンバーが参加した。このエリアに亜臨界水処理を利用した最先端有機廃棄物処理施設が設置され、上記メンバー等がその学術研究面での運用を任されることになっている。また、2017年には UTM パゴーキャンパスに生命工学分野の学部が新設され、関連研究のための専用スペースが MJIIT にも割り当てられる予定である。

亜臨界水処理にしても、生命工学分野学部の新設にしても、現在 UTM では関連分野の研究者が不足していることから、施設の基本設計やスタートアップを含めて MJIIT 教員の関与が大きく期待されている。また我々にしても、出来る限りの貢献をしてマレーシアの当該分野でのしっかりとした基盤構築に役立ちたいと考えている。その意味でも、筑波大学と UTM、MJIIT さらにはマレーシア政府との連携を緊密にする必要があると感じた。なお、2020 年に開業が計画されているマレー半島縦断高速鉄道の駅もパゴーに設置される予定であり、今後の発展が期待される。



(左：杉浦先生と岩本(文責)、中央：建築中の UTM 校舎、造成中のパゴー研究学園都市)